

奈良高専 図書館だより

No.8

記事

1. 読書感想文コンクール
2. 入選作品（8編）
3. ドイツの思い出

1980年12月 奈良工業高等専門学校 発行

昭和55年度

読書感想文コンクールを終えて

図書館委員会図書部会
国語科

毎年恒例の、夏休み課題図書を読書感想文コンクールは、今回で5回めになります。国語科の教官を中心に慎重に審査した結果、次に掲げる8名の諸君の作品を、優秀作として選出しました。氏名をここに掲載して、栄誉をたたえたいと思います。

1 MA	藤丸良介	1 E	笠目知秀
2 MA	大隅慶明	2 E	西野寛
3 MB	田中良昭	3 C	川井利恵子
4 E	三神悦子	4 C	染井潤一

なお、上記のうち、特に川井、田中、大隅3君の作品は、角川文化振興財団主催の「読書感想文全国コンクール」応募作品として送付しました。

そのほかに、佳作として選ばれた諸君の氏名を、次に掲げておきます。

○1MA 寺田真司 ○1MB 小路博之、吉田勇造 ○1 E 大林茂樹 ○1 C 長村秀樹、
馬場進 ○2MA 北口誠信 ○2MB 奥田淳一、長井孝之 ○2 E 村上隆 ○2 C
井上扶美、門脇竜一 ○3MA 江原健司、北村幸市 ○3MB 福本孝弘 3 E 野村勝、
金沢台範 ○3 C 大庭孝

「誰のために愛するか」

IMA 藤丸 良介

この本で僕は、「愛とはいったいどのようなものであるのか。」ということ強く考えさせられた。彼女(作者)は小さいころ気むずかしやの父のために暗い家庭生活をおくり、小説を書くようになると同人誌への参加、三浦朱門との結婚と人生を歩む。そして、これらの多くの出来事を経た彼女は、「人間にとって愛とは盲目的に信じることであり、憎しみといつも隣り合うもので、いつ瓦解するかわからない脆さを持つ尊いものである。」と言う。また彼女は、「子供がひとり燃える家の中にとり残されたとき、たいていの母親は火の中にとび込もうとする。これは動物的本能であろうとそれが愛である。」と言う。

僕には愛とはどのようなものかよくわからない。しかし、子供のために火の中に飛び込む母親の愛こそ真の愛ではないかと思う。母親にとって子供は血を分けた分身であり、なによりも愛する対象となる。だから、母と子の絆ほど強くすばらしいものはほかにないのではなかろうか。そうだからといって、異性を愛する、何かを愛するというのを愛でないといっているわけではない。それもまた1つのすばらしい愛であると思う。しかし、血のつながりのある愛には及ばないと思うのだ。世の中には、愛する人のために自分の命を投げ出す人もいるだろう。その人はその相手の人を心から愛しているのだと思う。しかしそれほどまで人を愛することが出来るものだろうか。僕はそこまで人を愛したことがないので、大変疑問である。そう考えるとよけい母と子の愛は真の愛だと思えてくる。

そのためか、この作品の中で、彼女の息子への教育には、彼女らしい愛情が、大変よくあらわれているように思った。彼女は小さいころ体が弱かったので、息子には自然な生活を望み、体と心の抱擁力の大きな子に育つことを期待した。そのために、彼女は息子に床に落ちたアメ玉をしゃぶらせ、ご飯を食べなくても心配せず、何でも与えるのでなく、望むものを与えようとした。これは、とらえ方によってはひどい育て方のように思われるかもしれないが、子供にとっては親に、「ああしろ。こうしろ。」というように縛られずに、本当に自然に育つことが出来るということは、大変よいことだと思う。

また彼女は、息子がケタはずれに大きい自由な正直な人間になることを願い、人間に対するとらわれない心を持つようにさせた。そのために年に一度、きちんとした服をきせてできるだけもったいぶったレストランへ連れて行き、ややこしい料理を食べさせる。どん

な場へ出て、おどおどしなくてすむためだ。あとの三百六十四日は、地面の上にも寝られるように訓練する。そして息子に、自分が平凡な1人の人間であって、それ以外の何ものでもないことを知らせるのだ。これによって金や住居や肩書などが人間の本質の上で意味を持たぬことを知るようになり、他人に会うとき、場所や衣服などで相手をみくびったりしなくなり、ひとりの大切な「人間」として向かい合えるようになるのである。彼女は息子に、このような教育をしたのだ。僕は、そこまで子供のことを考える母親というものに驚いた。そして、彼女の息子に少しうらやましいような気持がした。「人間として本当に大切な考え方というものを身をもって教えてもらえた。」という面にうらやましさをを感じるのだ。

自分はまだ本当の愛というものを経験したことがないだけに、この作品の主題は少し難しいと感じた。けれども、少しは愛というものがわかったような気がする。これからは、だれもが慣れっこになって、日常平然と対処している愛というものについて、じっくりと考えていきたいと思う。

「裸の王様」

IE 笠目 知秀

子供らしさを失い、孤独に耐える少年が、画塾の先生とのめぐり合いで、だんだんに性格が変わっていく。その画塾の先生が、いろいろと手をほどこし、絵画教育を通して、一人の子供の人間性を引き出していく様子が魅力的に描かれていた。

少年・太郎は、幼い時に母親に死に別れ、後妻である現在の母親と、絵具会社の社長である父親との三人暮らしである。何一つ不自由なく暮らしてきたが、ただ一つ、子供としての自由がなかった。学校から帰ると、ピアノ教師だの家庭教師だのが待っていた。太郎の描く絵には人形や電車ばかりで、人間が描かれていない。画塾へ行っても画を描こうとしなかった。それは、自由にのびのびと子供らしく活動できないので、自主性がなくなってしまったからだ、と思う。

太郎の父親は、会社の利益になることばかり考え、太郎のことは放ったらかしである。母親は先妻に負けぬよう、太郎のしつけにきびしい。友達といえば、隣の女の子しかいない。悪い友達ができぬよう母親が束縛したのだ。そんな環境で育ったなら、だれもが太郎のような性格になってしまうだろう。父親の愛を肌を感じることもなく、母親のびしびしとしたしつけに恐怖を感じていたに違いない。

ある日、太郎は先生と川原へ遊びに行った。すると、生き返ったようにはしゃぎまわり、今までとは、別人

のように変わった。このことが、子供にとって自由はいかに大切かということを感じさせる。その川原での経験がきっかけとなって、太郎が絵を描くようになる。そして、よく話すようになり、性格も、やや明るくなった。それは、先生ができるだけ親近感を与えようと心がけ、それが成功したからである。

ぼくは、この本を読みながら、自分の幼い頃のことをふっと頭に想い起こした。すっかり忘れかけていた「にがい味」が口中に広がる思いがしたのだった。ぼくも、幼年期には、典型的な内気で神経質な、いわゆる問題児のたぐいに入る子供であったようだ。なぜ、そんな子供になってしまったのか、時々父母は、ぼくのおいたちや、苦心した話を聞かせる。つまり、戸外へ出ることがなく、祖母と二歳上の姉だけが相手のぼくには、ほとんど他人との接触がなく家の中だけの交わりしかできなくなっていた。四歳のとき、幼稚園に入園したぼくは、もう一人の泣き虫K君と共に、十日以上過ぎて母が送って帰っていったあと、しばらく教室の出入口に立って泣いていた。何日たってもみんなと遊ばず、歌も絵も遊戯も、すべてやらない。先生や友達がどんなに誘いかけてもがんとして受けつけなかった。弁当も食わずに、そのまま持って帰る始末。ついに先生が困り果てて、ぼくは残された。「弁当を食べないと、今日は家へ帰しません。」園長から職員室の先生も全部、ぼくのまわりに座った。とうとう観念したのか、しぶしぶ食べたのを覚えている。担任の先生は、何とかして「普通の子」にしてやろうと一生懸命になってくれた。一年経った時には、声を出すこと以外はみんなと同じにできるようになった。二年目にどうしても声を出さないで、母は先生と相談して、「児童相談所の先生」のところへぼくを連れて、何日間か通った。そこでやっと頑なに閉ざしていたぼくの口から、笑い声も出るようになった。

子供の性格や情緒というものは、ちょっとしたことで傷ついたり歪んだりする。それを直すことは、容易ではない。未来社会は、今の子供たちによってつくられていく。だから大人たちは、子供の心を傷つけることなく、まっすぐに正しく伸びるように、心がけていかなければならないと思う。

「天平の藁」

2MA 大隅 慶明

天平の藁には、唐の高僧である鑑真の来朝という、とてつもなく大きい歴史上の出来事を背景にして、普照、栄叡、玄朗、戒融という天平時代における四名の無名の若い日本留学僧達の運命が鮮烈に描き出されていた。歴史の荒波にもまれ、それでも自分の生き方を

貫き通した四人の生き方は、青春のさ中で生き甲斐をつかみかねている僕に強く訴えるものがあった。

しかしながら、鑑真という大きな大きな人物を前にこれら若い僧達は、まるでこの作品に出てくる遣唐船のように、小さく哀れにも思えた。渡日に失敗し、流浪の旅に出る事八年、これらの苦しい体験によって、普照、栄叡は、鑑真という仏陀にも見える大人物の心の奥深くまで知るようになってきたのではないだろうか。伝戒の師、鑑真渡日計画に一番情熱的であった栄叡は、不幸にも放浪の旅の途中病で倒れて帰らぬ人となったが、それでも普照は、友人の意志を受け継ぎ、遂に来朝を成功させた。僕はこの普照のような人が好きだ。彼は栄叡ほど、鑑真を日本へ渡らせたいという情熱も行動力も持ち合わせてはいなかった。ただ親友の熱意に打たれただけであった。しかし最終的に、日本へ鑑真を送り届けたのは普照であった。一番受動的に見えるが実はそうではなく彼は、自分に与えられた運命に実に粘り強く、そして正確に従ったのだと思う。

四人の中で、玄朗という人物はあまり好きになれなかった。最初の渡日計画が失敗した時に、無謀な冒険に危険を感じ帰国を拒んだのだ。そして最後の航海の時も自分で帰国の手続きを普照に願ひ出しておきながら結局それも裏切った。異国で妻子を持ち、その執着と母国への思慕の情との間に揺れ動く彼は、逆に言えば留学僧の中で一番人間らしい生活をしたのではないだろうか。

もう一人これは四人と同期の留学僧ではなかったのだが、特に普照と親しかった老日本僧の業行についても、その人生観にピンとくるものがあった。入唐以来三十余年。彼の仕事と言うものは、經典類の書写ばかりで、その数は全く膨大なものになっていた。その自分が一生を賭けて經典類を写した執念は、並のもではなかった。一番安全にそれらを日本の地へ送り届けようとして同乗者達の反感を買うこともしばしばであったが、船の中でそれらの写経類のつまった大箱に囲まれて小さくなっている業行を見ると非難するどころかむしろ励ましてやりたいぐらいだった。結局、万全を期して航行したにもかかわらず、それら写経の山と業行は日本に着く事を天から許されなかった。一巻の經典も持ち帰れなかった哀れな僧といってしまうえば、それで終りであるが、しかし、何という荘大な徒勞であろう。歴史の陰にはそうした徒勞がひしめいていることに僕はしみじみと感動した。

それにしても鑑真は偉大であった。何事にもゆるがぬ心を持っていた。もしこれが、鑑真以外の僧ならば、八年間も流浪の旅に出たらおそらく渡日は断念し、計画は挫折しただろうと思う。栄叡にしても普照にしても何度となく途中で挫折しそうになった。しかし鑑真の不屈の意志によって挫折を乗り越える事ができたのだと思う。

「天平の藁」という題名の持つ意味がわかったのは、話も大詰めになったところであった。普照の元へ、一

個の唐様の鷓尾甕が送られてきた。送り主はだれか全くわからないが、僕は玄朗ではないかと思う。自分の弱い心のために、親友を裏切り続け、そして自分一人の幸福にひたすら執着した事を全くすまなく思っているという思いと、望郷の思いをこめて送ったのではないだろうか。そしてその甕は、まるで普照その人をあらわしているのではないかと思う。大乱の唐国を抜け出し、必死で渤海を渡ってきた甕。それは何となく彼の生き様に酷似していると思う。

今もその甕は、僕の学校にほど近い唐招提寺の金堂の鷓尾として使われているという。

「発想工学のすすめ」

2E 西野 寛

この本の出だしの「わが輩は機械である。」というのは、どこかで読んだ感じがしない事もないが、機械を擬人法を使って、魂を吹き込んでやり、不平不満を言わせているところなど、本嫌いな僕でも、気楽に読みはじめる事が出来て、とてもよかった。

この本の中には、僕にとって数々の驚き、感動があった。まさか、工学の本を読んでいて、人間の進化の謎について説明されるとは思わなかった。その部分には「猿のような動物がいた。それが怒ったか何かしたはずみにちょっと前足を上げたら、いままでよりも、かなり速くが見えた。だから立って歩くようになったのだ。」と書かれてあった。なんだそうだったのか！と思うと同時に、新しい感動が体中にわいてきた。また、木の伐採の場合の事では、ドイツは能率の良さを考える小型の「ツリーモンキー」とよばれる持ち運びの便利な機械を使うのに対して、アメリカは、ブルドーザーのばけ物みたいなのが、機械の手を使って、木を根こそぎ倒すというもので、その馬鹿力と雄大さに圧倒されてしまった。そして、本題の工学の分野、その中の家庭電気製品の場合「ランダム扇風機」という、デタラメに動く扇風機の事が載せてあった。風の強弱が勝手に変化し、しかも、その吹いている間隔や、首振りの角度までが、デタラメに変わるのである。だから自然に近い風がくるのだそう。今までの僕の考えからは想像もつかぬ事であり、とてつもない考えだと、開いた口がしばらくふさがらなかつたくらいである。また、同じ電気製品で「やわらかいラジオ」があった。もちの様にぐにゃぐにゃ曲がるというのだ。これなんか、いまだに信じられない。

しかし、驚いてばかりはいられないのである。仮にも工学を学んでいる者として、知識を吸収して、それを今後役に立てていかなければならないのである。たとえば、科学者が「できない」といったことでも、技

術者は「できない」といってはいけない。せいぜい「困難」だとしかいはいけないという技術者の根性には敬服させられた。そして、機械をつくるにあたっては、「こちらが機械の心をわかってしなれば、機械には人間の心がわかってもらえない」という気持ちを持つ事。たとえ、絶対にこれわれない機械ができたとしても、機器を粗暴に扱うくせがついたとすれば、すでにそのとき、人の心はこわれているというのである。この意見は、共感を覚えるとともに、痛感したことでもあった。これからは、この精神を持ち続け、自分の教訓として、将来に役立てたいと思う。

「裸の王様」

3MB 田中 良昭

「いけない。ニヤニヤしてはいけない。」僕は思わずそう考えていました。電車の中でこの作品を読んでいると、どうしても微笑が口元からこぼれ、自分でも收拾がつかなくなるのです。それほど、この作品は良いものでした。

どうして、微笑がこぼれてしまうのか。それは、やはりこの物語の主人公「太郎」が、僕も数年前までそうであったように、子供であるからでしょう。そして、その太郎が歪められた内面を次第に克服してゆくところに、思わず、自分も画塾の先生（次からは「彼」とします。）になったような気持ちになり、とても嬉しくなるのだと思います。

初めに嬉しくなったのは、太郎が彼と川原へ行ったところでした。太郎がコイを発見して、初めて子供らしい興奮を見せて、「先生、コイ…」と言った時、その時の太郎の姿が目に見えるようでした。太郎はきっと、手に泥をつかみ、頬は黒く汚れ、足は泥水でどろどろになった格好であえぎ、その目は驚きで大きく見開かれていたに違いありません。この時、僕は想像の中で、太郎を抱き、大声で笑いながら太郎の背をバンバンとたたいていました。「これでやっとなは開かれたぞ。」と、感じたのでした。

次に喜んだのは、太郎の「裸の王様」つまり「フンドシの殿様」の絵を彼が見て、「もう大丈夫だ。」と、感激しているところでした。ここでも彼の気持ちと僕の気持ちは一体化して、僕はすっかり嬉しくなりました。彼はきっと、「今までの苦勞が報われた。太郎は本来の子供にかえってくれた。私の夢をかなえてくれたのだ。」と、思ったことでしょう。そして、太郎に限りない愛情を感じたのではないのでしょうか。また、その「フンドシの殿様」の絵にも限り無い誇りを感じたのではないのでしょうか。

このように、僕はこの作品を通して終始楽しい思い

をしたのですが、僕がこの作品を好きになった原因は他にもあるのです。それは、先に書いたような明の部分と、それとは対照的な大人の内面を突いた、シビアな暗の部分とが、鋭くかみ合っているということです。特にアンデルセン児童絵画審査会の場面を描いた、最後のクライマックスの辺りになると、自己中心的で自信ばかり過剰で中身の薄い大人の愚かさや滑稽さが徹底的にあばかれています。この部分によって、僕は大人がいかに子供を把握できていないか、また、どれだけ大人が子供を知らず知らずのうちに歪めてしまっているか、ということが痛いほどよくわかりました。そして、そのことは、僕や、周囲の人間すべてに言えることであるとも思いました。作者は、歪められた太郎が本来の子供らしい自由さをつかんでいくプロセスを描きながら、そのことを読者の胸の内に知らず知らずに刻み込んでゆこうとしたのではないのでしょうか。つまり、作者が訴えたかったことは、「みんなもっと、もっと、子供を理解しなけりゃならないんだ。」「現在の親のしつけや学校の教育は間違っているんだ。もっと子供を開放してやらなければいけないんだ。」と、いうことなのではないでしょうか。

この作品の読後は、とても爽やかでした。そして、現在でも、厚い壁の向こうで苦しうにあえいでいる、暗い時期の多くの「太郎」と取り組んでいる多くの「彼」がいることを信じています。この作品は、特に小学校の先生や若い女の人に読んでもらって、子供をすばらしい環境のもとで、のびのびと育てて欲しいものだな…と、思いました。

「小説 智恵子抄」

3C 川合利恵子

私は、課題図書のリストの中で「智恵子」という文字をみたとき、胸はずませる想いだったのですが、佐藤春夫の作品だと知って、正直、腹立たしさを覚えました。というのは、智恵子抄の書けるのは、高村光太郎だけだ、他人に、何が書けるものか、と思ったからです。こうして、私は、佐藤春夫への敵対心という大きな興味をもって、この「小説智恵子抄」を読みだしたのです。

ところが、この私の敵対心は、いともたやすく崩れ私はいつの間にか智恵子になり、光太郎になり、この作品へ強くひかれていくのを感じました。そして、今まで私は光太郎智恵子の何一つ、本当のところを知らなかったのだと、恥ずかしく思われてきました。光太郎智恵子のような人と親しかったこの作者、佐藤春夫をうらやましく思い、光太郎智恵子をこのように、描きだすことができるこの人に、光太郎が重なっていく

のを感じました。

私は、光太郎智恵子は人間として、最高に幸福な人生を送った人たちではないかと思うのです。

この世で最も不幸なことは、後悔することだと聞いたことがあります。光太郎智恵子は、二人の交際がゴシップの種となって心痛めたときも、その日暮らしの毎日を送っているときも、そして、精神病という悪魔が二人を襲ったときも、決して、後悔しないのです。これでもかこれでもかと、不幸を与えられても、絶望の谷へ突き落とされようとも、後悔しないのです。

運命に流されるのでもなく、逆らうのでもない。運命を毅然として受け入れているのです。他人から見ると、のん気とも思えるほどの静かさで……。私は、この二人の静けさに、恐ろしさを感じます。それは、二人以外のだれにも、壊すことは、もちろん、触れることさえできない二人の強く確かな絆なのです。これほど強く結ばれた絆をもっている二人が、ほかにいるのでしょうか。まさに、智恵子は光太郎のために生まれ、光太郎は智恵子のために生まれたのです。

それほど強い絆で結ばれた二人に与えられたものが魂の別離ともいえる精神病であったことは、あまりにも悲しいことに思えます。しかし、それが一体、二人の何に影響したのでしょうか、それはただ光太郎智恵子の愛の深さの証明となっただけです。純粹無垢な智恵子にとって、正気狂気の違いなどというものは、無縁なのです。光太郎がいる、それだけが智恵子のすべてであり、真実なのです。智恵子には光太郎しかいないのです。

智恵子が、正気というものを失くしても、智恵子の真の魂は光太郎の中にあるのです。一心同体とは、まさにこの二人のことです。

人間、一心同体となり得る人とめぐり会えることがあるのでしょうか。いや、人間の存在自体が、不確かなものだと言われています。だからこそこの二人の愛が人間への無限の信頼を呼びもどしてくれたことに、私は感動するのです。

智恵子の肉体は滅びても、光太郎の中で魂は生き続けます。光太郎の肉体がこの世から消えても、光太郎智恵子の愛は決して消えません。光太郎の、そして佐藤春夫の『智恵子抄』がある限り、人々の心の奥深く、光太郎智恵子の真実の愛は生き続け、人々の心を清めていくことでしょ。

「黄昏のロンドンから」

4E 三神 悦子

私があの伝統の国、イギリスに憧れを抱き始めたのは、中学三年の頃からだろうか。あれ以来イギリスと

いう国に対しては異常なくらい敏感になってきていた。本屋でこの本を見つけた時、すぐに手が出たのもそのせいだろう。「ロンドン」——この素敵な響きを持つ街。いつか必ずこの足でイギリスの大地を踏みしめ、この目でイギリスを見、そしてこの体でイギリスを感じてみよう、それがいつからか私の夢となっている。特にロンドンには、あふれんばかりの夢と憧れがまつまっている私にとって、この一冊の本はどれだけ光ってみえたことだろう。

これは、作者木村治美の八カ月のロンドン滞在をもとにして書かれたエッセイである。初めに会ったショッピングな事は、実にロンドンの七割までが移民で埋めつくされているという事実であった。作者がロンドン市内の地下鉄に乗っても、あの有名な二階建てのバスに乗っても、いっこうにアングロ・サクソンのイギリス人を見かけなくて、ある日、郊外へ向かう列車の中で初めて、透けるような白い肌のアングロ・サクソンに囲まれたという一節に、私は「まさか、そんな事があるはずがない……。」と思った。ロンドンに対するイメージがほんの少し変わったような気がした。そして現在広がっている「英国病」。これは、福祉に守られ、少しも働かなくなった労働者によって生まれたものであるが、労働者のストライキにもイギリス人は惨めさを表に出さないようだ。このいかにもイギリス人らしい風格がきっと近い将来、「英国病」を消してしまうに違いないと、私は信じている。伝統の紳士・淑女の国イギリスが、こんな惨めな病気で没落して欲しくないのである。

このような、本当にお先まっ暗な話ばかりではなかった。イギリス人の行列を成す事についての精神などは、日本のそれとは非常に違うのだ。日本人も行列を作るのが好きな国民である。それは最終的には、自分一人のためのものであるが、イギリス人のそれは、自分の権利を主張すると同時に、他人の権利をも尊重するのである。ここに私はイギリス人の美しさ、社交性を見たような気がした。イギリス人は同国人同士、いやアングロ・サクソンの間でのみ、社交性を持っているという話を聞いた事があるが、絶対そんな事があって欲しくないと思っていた私にとってうれしかったのは、「ロンドンの七割の移民も、その美しい伝統に染まってしまっているのだ。移民の方が圧倒的多数を占める町なのに英国本来の良俗が犯されなかった事は、やっぱりイギリスが大変な国なんだろうと思わせる。」という一節だった。たとえ斜陽の国イギリス、黄昏の街ロンドンといわれようと、伝統の大国なのだ、私の憧れのイギリスは……。

この本の中で私は、イギリス人の思いやり、感じのよい社交性、秩序を守る精神等、見習うべき点が多いと思った。日本人は一見、白人に対してコンプレックスがあるようだが、実際は、自分達の方が、あの落ち目のイギリスなんかよりずっと豊かなのだと思っているのではないだろうか。我々が耳にするイギリスの状

況には、ちっともいいとこなしの事ばかりで、大英帝国のおもかげも全く見られないから、そうなるも不思議ではないのだが……。

実際イギリスが立ち直るのはまだ先の事であるに違いないが、その間もイギリス人は、きついやな顔を表に出すことなく、昔のように、紳士・淑女であるのだと思う。こんなに美しい伝統のあるイギリスという国を私は、ますます好きになってしまった。愛する国イギリスに明るい未来が待っていますように、そして女王様に栄光が訪れますように……。

「西部戦線異状なし」

4C 染井 潤一

これは、戦争によって何もかも破壊されてしまったある時代を、ドイツ人の少年兵が語る話である。この本の中には、今まで見聞きしてきたとは違った戦争が描かれている。それは決して劇的な栄光あるものでなく、人間の尊い生命を無残にも奪ってしまう生々しい戦争であった。戦線で死に直面している時、彼らはこわいと思える余裕さえなかった。死が迫る瞬間に何を考えられよう。生きるために、弾を打ち込むだけで、それは生きたいというごく自然な本能に他ならない。

作者レマルクは、そういう彼らの心理を少年兵パウルの実に印象深く語らせている。大人の世界に入ったばかりの、主人公パウルが知り得たのは、殺伐とした第一線の世界だった。死ぬのも生きるのも偶然。1分あそこに長くいたら、あの時もう少し右に寄っていたら、弾にあたって死んでいたかもしれない。自分のすべてを偶然にかけて、彼らは死物狂いで生きている。彼らは、戦線ではまるで獣のように、大地をはって戦うけれども、心の中には愛情も確かに持っている。その表現はぶっきらぼうで荒い。そのかわり、見せびらかしのいやらしさも、気取りもない。それはありのままの自分の表現なのだ。彼らは学生だったり、職人だったり、戦争前の生き方はさまざまだが今は皆兵隊だ。いつ死ぬかわからない。これは彼らにとっていくら振り切ろうとしても頭にこびりついて離れない事実だ。冗談で紛らわそうとしてもどうにもならない現実の中で、戦友どうしが気づかぬうちに強く、消えないつながりになっている。彼らの生きている様からは、まったくごつごつした印象を受けるのに、不思議に柔らかい、やはりそこに人間が生きているんだなあという感じを強く受けるのだ。

学生だったパウルは、教師に引率されて、クラスの仲間と兵隊になった。若い彼の持っていた不安定な観念は、戦争にある一つの理想化されたロマンチックな色を塗りつけた。しかし、実際の戦争は、学校と夢と、

少しばかりの趣味が生活のすべてであったパウルを変えてしまった。パウルは大切な青春と生きる目的を失ってしまう。そうして、心の奥底から押し上げてくるのが、戦争の無意味さを訴える声だ。ロシア人もフランス人も自分と同じ人間なのに、ただ一つの命令が彼らを敵にした。けれども、戦争に来るまで一度も見たことのないフランス人と互いに憎み合う理由さえないのに、なぜ戦わねばならないのか。戦争さえなければこんな無意味な殺し合いをする必要はないのに。彼はいたるところでこう自分自身に繰り返し問うている。戦争だからこの世の中の最高の刑罰、あらゆる侮蔑に値することがまかりとおる。その目に見えない理屈に合わない力がはつきりとパウルの心に焼きついたのは、パウルが自分の手で突き殺したフランス兵の死んでいくところを見ている時であったのだ。



ドイツの思い出

一般教科教授
図書部会主任 田北 寛剛

この夏、8月4日から一週間、ニュールンベルクで第6回国際ドイツ語教員大会が開かれ、約50ヶ国から一千人以上の外国の教員、ドイツ人の国語学者や、外国語としてのドイツ語教授法研究者達が集まり、教授法について熱心に討議された。私も丁度運よく、ドイツ語教育部会で幹事をしていた関係で、代表の一人として参加できた。

「よくドイツに行かれますね」と言われる。たしかに地方に住んでいる割には恵まれている。しかし語学習得に一番大事な10代、20代を戦中、戦後に過ぎた私達、昭和一けた組にとって、学生時代に音としてのドイツ語を耳にすることが少なく、ひたすら活字としての古典ドイツ語を読むことに専念した。おかげで、妙な事でドイツの青年に感心された事がある。四年前下宿で、夏のいつまでも暮れることのない夕方、(ドイツでは、夏暗くなるのは10時頃)庭でクライストの短篇集を読み直していたら、23才の物理学専攻の学生クリストフ君に「よくもそんな面倒くさいものを読みますね」とひやかされた。きっと、日本で言えば、日本語をつまみながらしゃべる外人が、西鶴を読んでいるようなものである。そう言えば最初の頃、前以って頭の中で文を用意して話した時に限って、簡単な文で言い直されたものであった。恐らく、「彼のかんばせ」式の文語文混りで話していたのであろう。

若い頃、うまく渡欧する機会に恵まれた人は、短期間で外国語をものにしている。本校機械工学科出身の

このように真向から戦争を凝視し得たパウルを、作者はあっけなく戦死させてしまう。この最後のあまりにも短い描写の中に、ぼくは、パウルが読者の中に生き続けることを願う作者の心を見た。それは、戦争の権力者に対する限りない怒りを押えることができない、我々に訴えずにはいられない作者レマルクの心なのだと思う。ぼくは、戦争を本当には知らないし、今なお内側から別の外の世界に戦争を見ているようなところがある。けれども、戦争の無意味さということをぼくは頭でなく心で知り得た。

「西部戦線異状なし」——この冷酷無慈悲な言葉が、静かにそれでいて激しく燃え続ける炎のような情熱をもって、作者の訴えたいことのすべてを語っているように思える。

M君は渡欧してわずか半年で、外人大学入学資格試験に合格し、本年11月でドクターの学位も取れたし、S君は卒業後一年滞独して、シュプラーハ・ディプローム(語学検定試験)に合格していたので、今年三菱電機でドイツ語会話のできる技術者として抜擢され、この11月より東独ライプツィヒでエレベーター保守技術指導員として派遣されている。他にも技術員として、数多くの卒業生が海外に派遣され、外国からたよりをくれる。そんな時、しばっておいてよかったと思う喜びと共に、未だ充分と言うには余りにも遠い自分の語学力を反省し、怠けがちな自分に打ち打っている。

ドイツには、大学の数そのものは日本よりはるかに少ないが、全部州立(ドイツは文教行政は州単位で行なわれていて、各州に文部省があるので、日本の国立と同じである。)で、大都会に集中することなく、同程度の大学が地方に分散されているので、地方の都市にも、大きな図書館や本屋が多い。始めてドイツに行った時、本屋に入って、何か面白い本がないかと眺めていたら、店員が近付いて来て、「どんな本がお入り用ですか」と尋ねられた。これはびっくりただ読みをされないためにしているのだと思ひ込み、丁度その頃読んでいた専門書の名をあげたら、「少しお待ち下さい」と奥へ入って、その本とその他同じ内容の本を4、5冊持って来て、「これも面白いが、こちらの方が更に深く掘り下げて書いているので、参考になります。」とやられてやむなく1冊買ったことがあった。ドイツでは本屋の店員は図書館の司書と同じように専門職で誇りを持って始終研修をやっているそうである。だから大ていの本は、題名を告げた丈でその本を持って来てくれるし、又これこれの事を調べたいと言っただけで、良い本を推せんしてくれる。だから給料も高いと聞いている。

私はドイツでは図書館よりも、大学の研究室を利用する。ボン大学には、手紙で以前から指導を受けてい

たアレマン教授がおられるので、ボンのドイツ文学研究室には渡欧する毎にお世話になっている。勤めの関係で夏休みが多いので、先生は外国に講演に行っておられるか、長期休暇を取って、故郷のスイスに帰っておられたりして、なかなかお目にかかれないが、一度冬に訪れた時は、私のために半日さいて下さり、日中は自ら各研究室を案内してまわり、私の研究に必要な本や論文を見せて下さり、夕方3時間程散歩しながら先生の現在研究しているテーマを解説し、その後、奥様そして3人の御子息もいっしょに自慢のワインを抜いて、奥様の心づくしの晩さんに招待して下さい。ボン大学は毎年DAADの留学生が最初に語学の研修を受ける所だけに、先生も日本人の語学力のくせをよくのみ込んでおられて、単語そのものは相当むつかしいのを使いながら、ゆっくりと話して下さいるので、比較的聞き取り易かったが、それでもいくつかがいかに「ヤァ」と返事をして「しまった」と思っていると、気付かぬ風をし、もう一度言い直され、心の中で赤面した事があった。食事の時になると、がらりと話題を変え、日本に來られた時の思い出話、それに奥様や御子息の在独中の日本人の家庭との交際の話等、夜ふと気付いて時計を見て10時になっているのに驚いて腰を上げるまで、時の経るのも気付かぬ程見事な歓迎ぶりであった。

ボン大学のドイツ学研究室(ドイツ文学語学だけではない)は、元宮殿の建物の一画の3階全部をあてている。階段を上り切った所にガラス張りの受け付けがあり、一応出入りをチェックしているが、中に入ると教室の2倍位の3部屋に、窓側の一面を除いて、天井までぎっしり本が並べられ、はしごに昇って自由に本が取れ、真中のテーブルで読書できる。他に助手の部屋、各教授の小部屋があり、教授の部屋は秘書室兼応接室と読書室に分れている。喫煙は灰皿のある小部屋だけに決められている。

アレマン教授の許可をもらってからは、研究室の使用はもちろん、コピーの必要があれば、秘書に頼めば

すぐやってくれる。ある時、フランスの文献が欲しかったので、助手に尋ねたら、秘書が証明書の様なカードを作成して、これを図書館に持って行きなさいと渡してくれた。使い方がよくのみこめなかったので、いつも横で勉強しているフランス人の女子学生にたずねてみたら、自分の本をさっさと片付けてついて来いという。説明するより実地で教えてやるというつもりらしい。索引カードで番号を探し出し、用紙に書き込み、証明書といっしょに受け付けに渡しながら、10分程でその本を持って来てくれた。「全く日本と同じだ」と言ったら、「では今度から一人でできるね」と片目をつぶってみせて、さっさと研究室に戻って行った。後で他の学生に「こんな時には、コーヒーにでも招待すべきでしょうね」とたずねたら、「いや、普通はむしろ“ダンケ”だけの方が良い。それともお前は彼女に関心があるのか?」と逆に聞かれた。外国人とつき合う時には、その土地の風俗習慣をよく心得ていないと誤解されることがある。その後、彼女と時々メンザ(大学食堂、大へん安い)で昼食を共にしたが、「招待します」と言わない限り、必ず割りかんだった。

ヨーロッパ流の作法が分りにくかったり、不作法になる時は、むしろ断って日本流にした方が良い場合がある。

ある時、鱒を食べに行ったことがある。魚をナイフとフォークでさばくには少し熟練を要する。(今ではもうすっかり慣れたが) どうもうまく骨がとれない。止むを得ず「はしならうまくさばけるのだが」とはしを出したら、満場の注目をあび、日本人の器用さに驚いていた。おかげで10本程持っていたはしは全部贈呈する破目になった。しかし日本人がスプーンで食べる時(彼らは飲むとは言わない)、コーヒー等を飲む時音を立てるのは有名である。彼らには、よほど下品に聞えるらしい。逆に彼らは人前で平気で音を立てて鼻をかむ。失敗を重ねながら、一つ一つ習得するより仕方がない。結局は他人に迷惑をかけないことが、彼らのマナーの基本である。

寄贈図書について

一般教科 笠野先生から、次のような書籍を寄贈して頂きました。既に閲覧室に配架してありますのでご利用下さい。

THE BOOK OF POPULAR SCIENCE	全10巻
THE BOOK OF KNOWLEDGE	全10巻
OUR WONDERFUL WORLD	全18巻

10月27日から11月9日の2週間の読書週間中に、図書室では1人でも多くの学生諸君が気軽に図書室を利用出来、また興味を持ってくれる事を願って、「安野光雅の本」を展示いたしました。美しい童話の挿絵や、奇抜な発想、空想の世界へ御案内しよう、という試みでしたがいかがでしたか。図書室では今後もこのような催しをしたいと思います。大切な青年期にこの図書室で是非一冊の本を見付け、生涯の友とされるよう願っています。 [図書室]